

# 2024(令和6)年上半期の わが国周辺の漁海況の特徴について

---

## 目次

---

要約ー2024年上半期のポイント	1
1. わが国周辺の海況	4
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	7
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ	9
(2)さば類	9
(3)マアジ	10
(4)カツオ	10
(5)ビンナガ	12x
(6)スルメイカ	13
(7)アカイカ	14

---

2024年8月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター  
(JAFIC)

## 要約－2024年上半期のポイント

- ・黒潮大蛇行が今期も継続し観測史上最長となった。親潮は引き続き弱めであった。対馬暖流は強めで推移した。海面水温は日本周辺の多くの海域で高めであった。三陸～道東海域では近年最高を更新した。
- ・全国主要 117 港における 1～5 月の累計水揚量は、前年同期比 87%の 62.1 万トンで、2010 年以降で最低となった。平均価格は前年同期比 96%の 223 円/kg であったものの、依然として魚価高が続いている。この原因として、低調だった水揚量に加えて、円安による輸入水産物価格の上昇や燃油をはじめとする資材価格の高騰などが考えられる。
- ・さば類の水揚量は減少傾向にあったが、前年並みで下げ止まった。近年好調だったマイワシの水揚量は前年をやや下回った。マアジとカツオの水揚量は前年並みであったが、ビンナガは好漁だった前年を下回った。スルメイカの水揚量は減少が続いた。

### ● わが国周辺の海況

- ・日本近海の海面水温は、三陸～道東海域や日本海中央部を中心に近年(2011～2020 年平均)より高めで推移し、三陸～道東海域では近年最高を更新した。
- ・黒潮大蛇行は今期も継続し、観測史上最長を更新中である
- ・黒潮域の海面水温は、四国沖や熊野灘～遠州灘周辺では暖水波及や黒潮流軸接岸の影響で、おおむね近年より高めであったが、黒潮流軸が一時的に離岸した際には近年より低めになった。
- ・親潮の勢力は、期間を通して平年(1993～2017 年の平均)よりかなり弱めで、三陸沖～道東沖は黒潮続流の北偏や続流から波及した黒潮系暖水の影響で高水温が続き、三陸沖海域や道東海域の海面水温は近年最高を更新した。
- ・対馬暖流の勢力は、一時的に平年より弱めになったが、強めであることが多く、流路は大和堆付近を通過することが多かった。このため海面水温は、大和堆を含む日本海中央部で近年より高めとなることが多かった。

### ● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・JAFIC が調査している全国主要 117 港における 2024 年 1～5 月の調査対象全魚種の累計水揚量は、前年同期比 87%の 62.1 万トンで、現在と同じ規模で調査を開始した 2010 年以降で最低となった。
- ・平均価格は前年同期比 96%の 223 円/kg で、2010 年以降で最高価格であった前年に次ぐ高値であった。前年が著しく高値だったことから、前年同期を下回る魚種も多かったが、全体では 2010 年以降で最も高値であった前年同期並みで推移しており、依然として魚価高の状況が継続している。

### ● マイワシ

- ・マイワシの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 27.9 万トン(太平洋側 22.1 万トン、日本海側 5.8 万トン)で、前年同期(34.1 万トン)を約 6 万トン下回った。
- ・太平洋側では体長 16～19cm(1～3 歳魚)主体で、20cm 以上(4 歳魚以上)も混じった。
- ・太平洋側では銚子港の 1～6 月の水揚量が前年を 4.9 万トンも下回った原因として、黒潮続流の北偏に伴う水温上昇により、親魚の南下が遅れたこと、来遊量が減少したことが挙げられる。
- ・日本海側では 3～4 月にかけて隠岐海峡周辺での漁獲が好調であったが、前年に比べて盛漁期が遅れた。
- ・境港水揚物の体長は 17～19cm(1 歳魚以上)が主体であった。

## ● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・さば類の全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 11.6 万トン(太平洋側 2.9 万トン、東シナ海・日本海側 8.7 万トン)で、前年同期(11.6 万トン)並みであり、特に太平洋側で 2021 年以降の不漁が続いている。
- ・太平洋側では、1~6 月のまき網による水揚げがほとんどなく、銚子港では水揚量が前年を大きく下回った。
- ・東シナ海・日本海側では、1~2 月に対馬海域主体に漁獲され、1~2 月と 5~6 月に隠岐海峡周辺でまとまった漁獲があった。

## ● マアジ

- ・マアジの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 3.3 万トン(太平洋側 0.7 万トン、日本海側 2.6 万トン)で、前年同期(3.3 万トン)並みであった。
- ・日本海側では、5 月ごろから隠岐海峡周辺で漁獲が続いたが、境港における 1~6 月の水揚量は前年の約半分であった。
- ・東シナ海側では、5~6 月は中南部海域主体に対馬海域でも漁獲が続き、1~6 月の水揚量は前年をやや上回った。

## ● カツオ

- ・竿釣りによる生鮮カツオの 1~6 月の水揚量は 1.1 万トンで、前年および過去 4 年平均並みだった。
- ・4 月までは例年漁場になる「伊豆小笠原列島沿い」と近年活況を呈する「南西諸島周辺」で漁場が形成された。6 月は東北北部海域が漁場となり、前年より 1 ヶ月半程度早かった。
- ・本年は伊豆小笠原列島沿いのカツオの北上が例年より遅かった。
- ・6 月下旬に、戻りカツオ並に脂が乗ったカツオが宮城県気仙沼港に多く水揚げされた。
- ・竿釣りによる生鮮カツオの全国月平均価格は、全国的に水揚量が伸び悩んだ 4 月までは 479~881 円/kg と高値で推移し、その後価格は下がった。まき網による生鮮カツオは水揚量が伸び悩んだにもかかわらず、281~345 円/kg で前年より安値傾向だった。

## ● ビンナガ

- ・全国の生鮮ビンナガの 1~6 月の水揚量は 1.1 万トンで、不漁だった 2022 年並だった。
- ・6 月中旬までビンナガのまとまった漁獲がなかったが、6 月下旬に青森沖の暖水渦周辺でビンナガの漁獲が突如始まり、その後は同海域でビンナガ主体に、7 月上旬まで短期集中的に漁獲された。
- ・全国平均価格は 1~5 月は 337~410 円/kg で前年より安値だった。6 月は 488 円/kg で近年同月では最も高値だった。

## ● スルメイカ

- ・全国主要港における本年の生鮮スルメイカの水揚量は 6 月末現在 1.3 千トンで、前年同期(2.0 千トン)の 63%、2019~2023 年同期の平均値(4.7 千トン)の 27%であった。
- ・日本海の小型いか釣り船の主漁場は例年 5~6 月には能登半島沿岸に形成され、生鮮スルメイカの水揚げは金沢港に集中する。しかし、金沢港の本年 1~6 月の水揚量は 0.2 千トンで、前年同期(1.4 千トン)の 14%、2019~2023 年同期の平均値(2.1 千トン)の 10%であった。一方、太平洋側で水揚げの多い石巻港の本年 1~6 月の水揚量(底曳網主体)は 0.4 千トンで、前年の 82%であった。
- ・全国主要港における本年の冷凍スルメイカの水揚量は 6 月末現在 350 千トンで、前年(328 千トン)の 106%で、2019~2023 年同期の平均値(802 千トン)の 42%であった。

## ● アカイカ

- ・本年1月初旬に6隻の中型いか釣り船が三陸近海の冬季アカイカ操業を試みたが、前年と同様に群れが薄く十分な水揚量確保には至らなかった。
- ・5月中旬から北太平洋西経海域で大型いか釣り船1隻、中型いか釣り船24隻がアカイカ操業を開始し、7月現在も操業を続けている。
- ・今期、北太平洋西経海域に出漁した中国のアカイカ釣り船の隻数は30隻で、7月現在も操業中である。

# 1. わが国周辺の海況

## (1) 海域別海況概要

2024 年上半期の海面水温は、三陸～道東海域や日本海中央部を中心に近年(2011～2020 年の 10 年平均)より高めの状態が続き、三陸～道東海域ではそれまでの最高を更新した。

### 1) 黒潮域・東シナ海

2017 年 8 月に始まった黒潮大蛇行は今期も続き、継続期間は 7 年に迫り、観測史上最長を更新中である。

冬季(1～3 月)の黒潮流路(図 1-1)は、前年 12 月に九州南東沖で発生した小蛇行が発達しながら東進したため、九州～四国沖で著しく変動し、この変動が黒潮の下流側に徐々に伝わった。このため 3 月には九州～四国沖では著しく離岸し、潮岬沖と伊豆諸島付近で蛇行する W 字型の流路をとり、伊豆諸島付近の蛇行は 3 月下旬に発達して八丈島南東沖まで南下した。

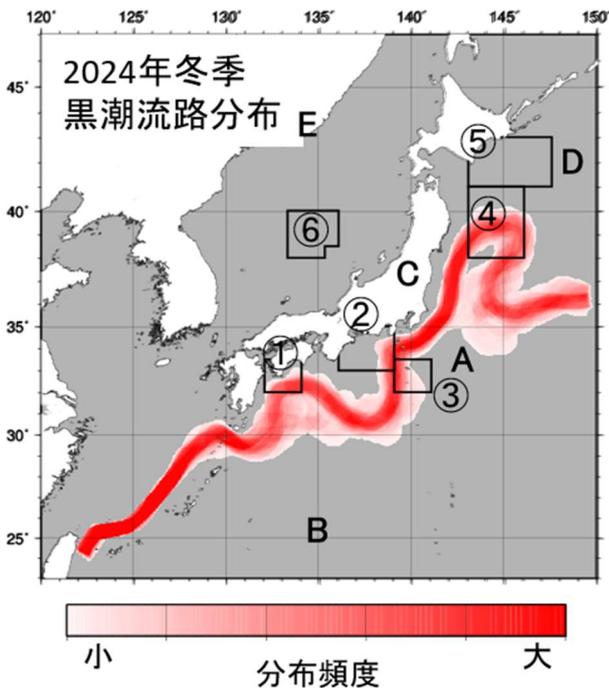


図 1-1. 2024 年冬季の黒潮流路分布(海上保安庁海洋情報部の海流 GIS データを使用) 黒枠①～⑥は図 3 の海面水温の近年差を計算した範囲

春季(4～6 月)の黒潮流路(図 1-2)は、四国沖では離岸が継続し、伊豆諸島付近では 4 月までは蛇行が八丈島南東沖まで南下して青ヶ島をまたいでいたが、

5 月はこの蛇行部が冷水渦として切り離された。これに伴い遠州灘の屈曲部が消滅し、ほぼ直線的に北東進する流路(図 1-2)をとり、三宅島～八丈島付近を通過する事が多かった。6 月は九州南東沖で再び小蛇行が発達し始め、遠州灘沖では屈曲部が復活して大島～三宅島付近を通過した。

四国海域(図 2-①)の海面水温は、おおむね近年より高め(図 3)であったが、3～4 月は黒潮流軸の離岸が進んだ影響で、やや低めの時期もみられた。

遠州灘～熊野灘(東海)海域(図 2-②)の海面水温は、遠州灘沖の黒潮屈曲部から暖水が波及したため、おおむね近年より 1～2℃高めであったが(図 3)、3 月は石廊崎沖で一時的に黒潮が離岸したため、近年より低めの時期がみられた。春季の海面水温はおおむね近年より高めであったが、5 月には一時的に遠州灘沖の黒潮屈曲部が消滅して暖水波及が弱まったため、近年より低めの時期がみられた。

伊豆諸島南部(図 2-③)の海面水温は、黒潮流軸が通過して暖水に覆われたため、期間を通して近年より高めであった。一方、沖縄東沖～本州南方沖(図 2-B)や関東南東沖(図 2-A)の海面水温は、冬季には風や日射量が少なかった影響で近年より低め海域もみられたが、春季は風が弱く気温が高い事が多く、近年より高めである事が多かった。

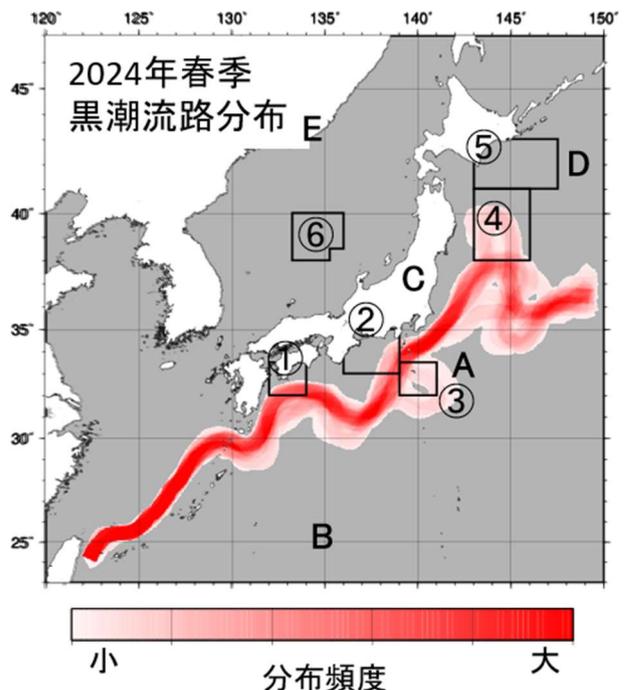


図 1-2. 2024 年春季の黒潮流路分布

東シナ海の海面水温は気象の影響による変動が大きく、冬季は風が弱く気温が高かった影響で近年より高めの海域が多かった。5月以降、風が強くと日射量が少なかった影響で琉球列島西沖～九州西沖を中心に1℃前後低めの海域が広がった。

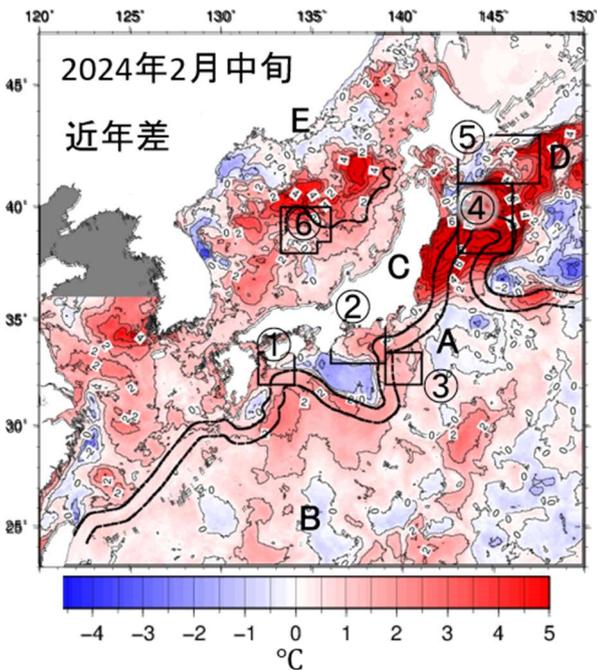


図 2-1. 2024 年 2 月中旬 (冬季) の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

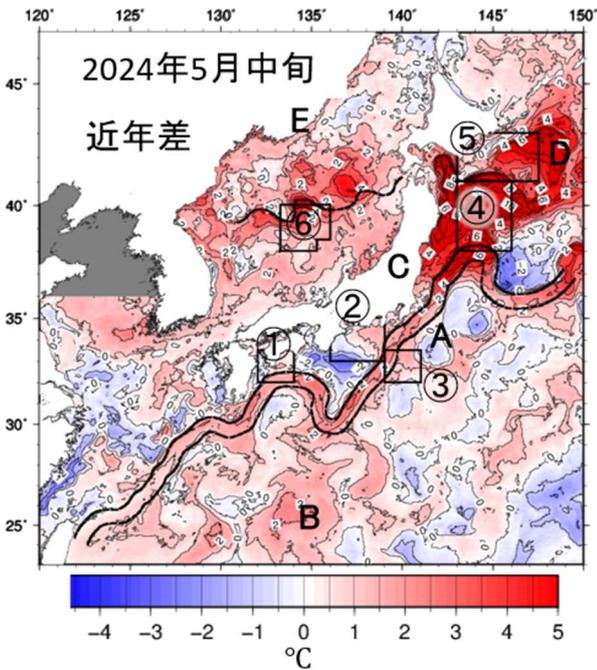


図 2-2. 2024 年 5 月中旬 (春季) の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

## 2) 親潮域・混合水域

親潮の面積(100m深で5℃以下)は、前年秋季に引き続き平年(1993～2017年の平均)よりかなり小さい状態が続いた。冬季は一時的に三陸北部沿岸まで親潮系水が南下したが、親潮第一分枝の南端はおおむね道東沿岸に停滞した。

冬季の黒潮続流(図 1-1)は、岸側の最北上部(峰)が前年に引き続き三陸沖の40°N付近まで著しく北偏した。鹿島灘沖では3月に北上部が切り離されて、巨大な暖水塊を形成した。

春季の黒潮続流(図 1-2)は、上記の巨大な暖水塊が4月に黒潮続流と再結合し、黒潮続流は再び三陸沖の40°N付近まで北偏した。しかし、5月には仙台湾沖で黒潮続流北上部が切り離され、暖水渦を形成した。この暖水渦は徐々に北東進し、6月には釧路南沖付近まで達した。

常磐北部海域(図 2-C)から三陸沖海域(図 2-④)、道東海域(図 2-⑤)、道東はるか沖(図 2-D)にかけての海面水温は、黒潮続流の北偏や黒潮系暖水の影響で期間を通して近年より高めの状態が続いた(図 3)。

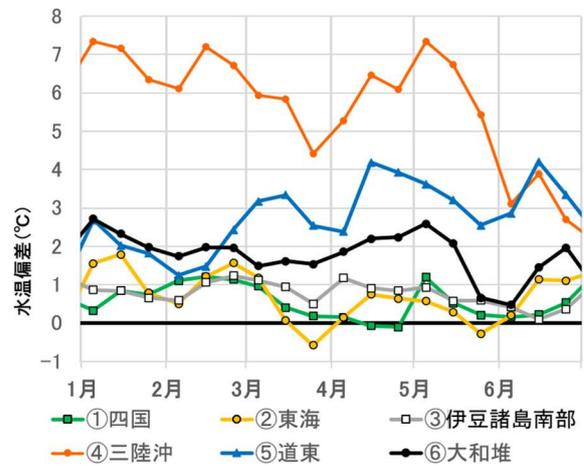


図 3. 海域毎の海面水温の近年差

海面水温の近年差は三陸沖海域(図 2-④)では、冬季～春季前半は、それまでの最高であった2023年5月中旬の+5.3℃を超え、たびたび+7℃以上(図 3)になり、1月上旬と5月上旬は過去最高の+7.3℃を記録した。道東海域(図 2-⑤)もそれまで最高であった2023年9月中旬の+3.8℃を超え、2024年4月中旬に過去最高の+4.2℃(図 3)を記録した。一方、5月以降は巨大な暖水渦が徐々に北東進するととも

に、三陸沖海域には親潮系の冷水が入り、近年差は急速に縮小した。また、道東海域まで暖水渦が北東進したため、2024年6月中旬に再び近年最高の+4.2℃を記録し、その後も高水温が継続した。

### 3) 日本海

冬季は対馬暖流の勢力は、前年に引き続き平年より強め～かなり強めの状態が続いた。対馬暖流の流路は、冬季は山陰西部沖～大和堆付近を通過し、能登半島～佐渡沖では蛇行して南下し、東北では離岸する流路であったが、徐々に蛇行が縮小して日本海中央部を流れる流路になった(図 2-1)。このため、日本海中央部には近年より3～4℃高めの海域が広がり、大和堆海域(図 2-⑥)の海面水温の近年差は+2℃前後で推移した。

対馬暖流の勢力は、4～5月上旬は平年より弱め～かなり弱めになったが、6月はかなり強めに回復した。対馬暖流は4～5月は冬季に引き続いて大和堆付近を通過して中央部を流れる流路であったが、6月は接岸傾向になり、大和堆以南を通過し、若狭湾沖では蛇行しつつ南下し、東北も接岸傾向になった(図 2-2)。大和堆海域(図 2-⑥)の海面水温は、4～5月上旬は対馬暖流の勢力は弱いものの対馬暖流が通過していたため、2～3℃高めであった。一方、5月下旬以降は対馬暖流の勢力は復活し始めたが、大和堆以南を通過するようになったため、大和堆海域の海面水温の近年差は縮小した。

(海洋事業部 矢野泰隆)

## 2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

JAFIC が調査している全国主要 117 港における 2024 年 1～5 月の調査対象全魚種の累計水揚量は 62.1 万トンで、前年同期(71.3 万トン)の 87%と、現在と同じ規模で調査を開始した 2010 年以降で最低となった(図 4)。平均価格は 223 円/kg で、前年同期(237 円/kg)の 96%と、2010 年以降で最高価格であった前年に次ぐ高値であった。なお、本報告の水揚量と価格は JAFIC「おさかなひろば」による。

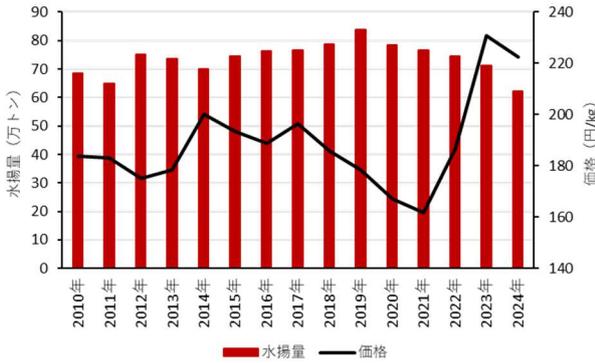


図 4. JAFIC 調査港の 1～5 月累計水揚量と平均価格の推移

主要 49 魚種の 2024 年 1～5 月の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年同期と比較した(表 1、図 5)。なお、水揚量・価格ともに「前年同期並み」とあるのは増減率 0～5%の場合を示す。水揚量は、ウルメイワシ、ヤリイカ、ハマチ(養殖)など 16 魚種が前年同期を上回り、さば類、マアジ、冷凍ミナミマグロなどの 12 魚種は前年同期並み、マイワシ、生鮮カツオ、メカジキなど 21 魚種は前年同期を下回った。平均価格は、ニシン、ホッケ、冷凍スルメイカなどの 14 魚種が前年同期を上回り、ブリ、生鮮カツオ、生鮮キハダの 8 魚種が前年同期並み、スケトウダラ、ピンナガ、生鮮メバチなど 27 魚種が前年同期を下回った。

このように、2024 年 1～5 月は、前年同期と比較すると水揚量は全般的に低調であった。全魚種の合計水揚量は前年同期から約 9 万トン減少したが、その理由の一つとして、魚群南下の遅れなどからマイワシの水揚量が約 5.5 万トン減少したことが挙げられる。また、平均価格は、前年が著しく高値であったこともあり、前年同期を下回る魚種が多かった。価格の上昇は徐々に落ち着きつつあるものの、全体では 2010 年以降で最も高値であった前年同期並みで、依然と

して魚価高の状況が継続している。円安による輸入水産物価格の上昇や燃油をはじめとする資材価格の高騰などの影響が示唆される。

表 1. JAFIC 調査港の 2024 年 1～5 月の産地魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較(2023 年 1～12 月の平均価格の昇順に並べ、1,000 円/kg 以上の魚種を赤字で示した。)

	1～5月						1～12月
	2024年		2023年		前年比		2023年
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格	価格
スケトウダラ	39,221.8	57	37,505.1	72	105%	78%	64
マイワシ	222,835.2	86	278,197.4	74	80%	116%	71
カタクチイワシ	1,049.8	92	2,417.3	96	43%	95%	92
ウルメイワシ	11,648.6	80	9,952.3	113	117%	71%	100
ニシン	3,377.6	111	3,356.0	95	101%	117%	102
ホッケ	6,711.2	117	5,229.5	77	128%	153%	112
さば類	89,123.6	130	94,075.0	131	95%	99%	138
ほたてがい殻付	9,769.5	166	9,055.8	183	108%	91%	204
マダラ	18,018.1	192	18,907.0	206	95%	93%	253
マアジ	26,784.4	240	27,604.4	267	97%	90%	277
ブリ	11,750.3	305	14,364.5	315	82%	97%	306
冷カツオ	67,072.7	270	65,437.5	316	102%	85%	315
かれい類	4,478.1	299	5,163.6	302	87%	99%	318
生カツオ	8,677.6	430	10,651.5	450	81%	96%	386
サンマ	0.6	255	0.9	350	63%	73%	420
ピンナガ	8,029.2	372	13,975.6	469	57%	79%	457
冷キハダ	12,797.7	432	12,051.5	548	106%	79%	475
さわら類	829.8	656	539.8	1,101	154%	60%	685
アキサケ	8.9	1,032	18.8	921	47%	112%	697
マダイ(天然)	1,821.8	669	1,782.7	712	102%	94%	737
ギンザケ(養殖)	2,448.8	822	3,773.3	778	65%	106%	746
ヤリイカ	1,623.1	806	1,395.2	850	116%	95%	752
マカジキ	270.7	780	284.9	866	95%	90%	809
冷メバチ	7,747.5	851	8,691.1	952	89%	89%	862
生キハダ	3,487.2	969	4,108.0	932	85%	104%	910
ヒラマサ	340.2	789	265.1	1,012	128%	78%	913
生スルメイカ	750.8	824	1,321.2	724	57%	114%	931
サザエ	81.9	1,154	98.4	1,022	83%	113%	971
ヒラメ(天然)	891.4	937	817.6	997	109%	94%	1,020
マダイ(養殖)	68.5	1,115	81.3	1,041	84%	107%	1,091
生メバチ	1,365.6	825	1,519.5	1,197	90%	69%	1,111
たご類	1,649.0	1,043	1,260.1	967	131%	108%	1,129
メジマグロ(ヨコワ)	162.9	1,128	207.0	1,246	79%	91%	1,132
ハマチ(養殖)	337.4	1,001	74.6	1,288	452%	78%	1,224
メカジキ	675.6	1,536	969.8	1,452	70%	106%	1,250
あなご類	322.9	1,050	210.5	1,135	153%	93%	1,290
冷スルメイカ	339.5	1,926	318.0	1,262	107%	153%	1,625
キンメダイ	789.8	1,729	956.2	1,613	83%	107%	1,747
冷ミナミマグロ	1,519.2	1,810	1,607.0	2,848	95%	64%	1,954
ヒラメ(養殖)	8.0	1,994	5.6	2,104	144%	95%	2,068
アカムツ(バドグロ)	98.4	2,120	113.3	1,701	87%	125%	2,101
あまだい類	76.5	3,174	73.4	2,772	104%	115%	2,637
クロマグロ	1,551.6	3,171	1,515.9	3,457	102%	92%	2,744
キンキ(キチジ)	406.7	2,263	326.8	2,523	124%	90%	2,819
クルマエビ	6.9	4,905	5.2	5,786	134%	85%	4,796
トラフグ	103.5	4,423	78.9	4,885	131%	91%	4,836
イセエビ	36.9	5,736	48.5	6,925	76%	83%	6,431
あわび類	9.6	8,381	14.0	9,393	68%	89%	9,672
うに類(剥き身)	40.5	7,834	39.2	9,275	103%	84%	14,887

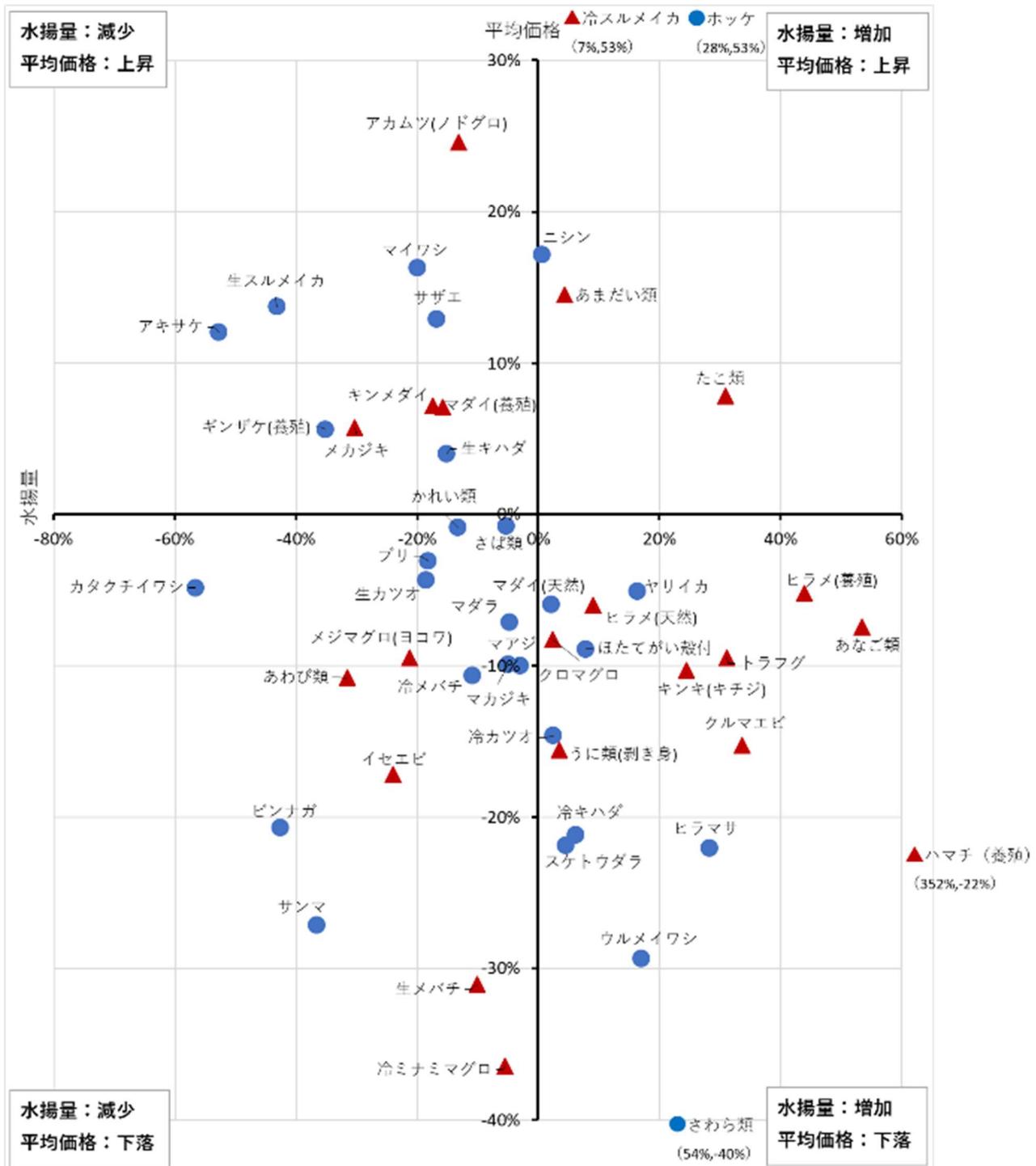


図 5. 主要 49 魚種の水揚量と平均価格の比較(2024 年 1~5 月/2023 年 1~5 月)横軸と縦軸の目盛に記載した%は、2023 年同期比の増減率を示す。▲は 2023 年 1~12 月の平均価格が 1,000 円/kg 以上、●はそれ未満の魚種を示す。目盛の範囲外にある魚種については、水揚量と価格の増減率をカッコ内に示す。

(水産情報部 石山なな子)

### 3. 魚種別の漁海況・市況

#### (1) マイワシ

マイワシの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 27.9 万トン(太平洋側 22.1 万トン、日本海側 5.8 万トン)で、前年同期(34.1 万トン)を約 6 万トン下回った(図 6)。太平洋側では一艘まきの水揚物は体長 16~19cm(1~3 歳魚)主体で、20cm 以上(4 歳魚)も混じった。犬吠埼付近では、3 月~4 月下旬に漁獲がまとまったが、5 月には一艘まきの水揚物の体長が 16~17cm(1, 2 歳魚)主体と小さくなり、銚子港での 1~6 月の水揚量は前年を約 4.9 万トン下回った。その主な原因として資源量・親魚量は横ばいであるが黒潮続流の北偏に伴う水温上昇により、親魚の南下が遅れたこと、来遊量が減少したことが挙げられる。

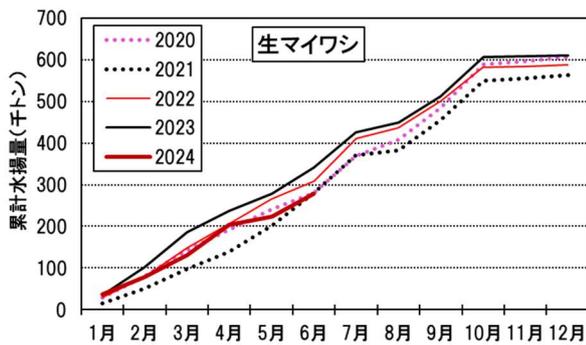


図 6. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

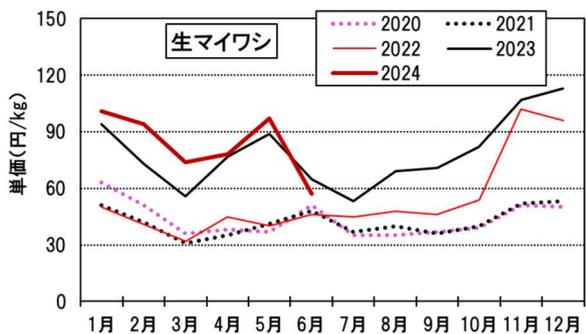


図 7. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

金華山沖付近では 4 月に水揚量が増加し、一艘まきの水揚物も体長 14~18cm(0~3 歳魚)主体に幅広い年齢で構成されたが、5 月は 14~15cm(0 歳魚)が主体に漁獲され、6 月には 16~19cm(1~3 歳魚)が再び漁獲された。6 月には道東沖の棒受網とまき網漁業が開始され、資源量が豊富な体長 14~

16cm(0, 1 歳魚)主体に漁獲されたが、6 月上中旬の棒受網では体長 20cm 以上も混じった。日本海側では 3~4 月に隠岐海峡周辺での漁獲が好調で、境港の 1~6 月の水揚量は前年を 0.3 万トン上回ったものの、前年に比べて盛漁期が遅れた。3~4 月の水揚物は体長 17~19cm(1 歳魚以上)が主体であった。価格は 1~5 月は 2020 年以降で最高であったが、6 月は前年を下回った(図 7)。

(水産情報部 源 浩輔)

#### (2) さば類

さば類の全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 11.6 万トン(太平洋側 2.9 万トン、東シナ海・日本海側 8.7 万トン)で、前年同期(11.6 万トン)並みであった(図 8)。太平洋側では、2022 年からの不漁が続いており、1~6 月にはまき網による水揚げがほとんどなく、銚子港では前年を大きく下回った。5, 6 月の北上期には石巻港でまとまった水揚げがあったが、これは沿岸を北上した群が定置網や底曳網で漁獲されたものである。東シナ海・日本海側では、1~2 月に主に対馬海域で漁獲され、1~2 月と 5~6 月には隠岐海峡周辺でもまとまった漁獲があった。

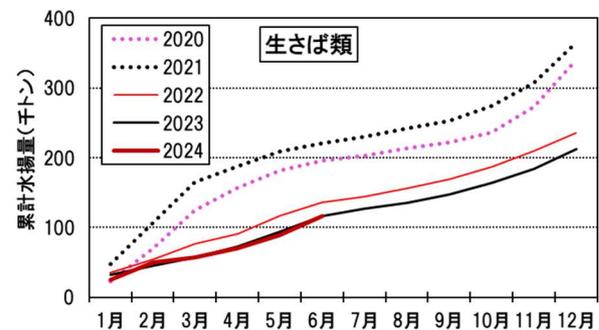


図 8. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

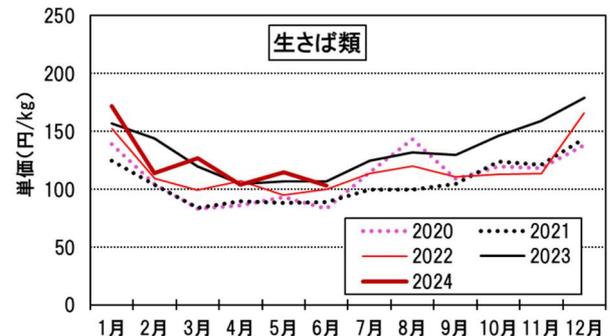


図 9. 2020~2024 年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

日本海側では盛漁期の遅れがみられたが、1～6月の境港の水揚量は前年並みであった。

隠岐海峡での中小型まき網による水揚物は、1～2月は尾叉長30～34cm(2～3歳魚以上)主体、5～6月は25～26cm(1歳魚)主体であった。対馬海域での水揚物は1～3月にかけて21～23cm(1歳魚)主体、6月は25～32cm(2歳魚以上)主体であった。九州西沖海域の水揚物は2月では21～24cm(1歳魚)と25～32cm(2歳魚以上)が主体であったが、盛漁期の3月では21～24cm(1歳魚)が主体となった。東シナ海中・南部海域の水揚物は盛漁期の4～6月にかけては18～21cm(1歳魚)が主体であったが、4月は25～26cm(2歳魚以上)も混じた。価格は全国的に近年の中では高水準であった前年並みで推移した(図9)。

(水産情報部 源 浩輔)

### (3) マアジ

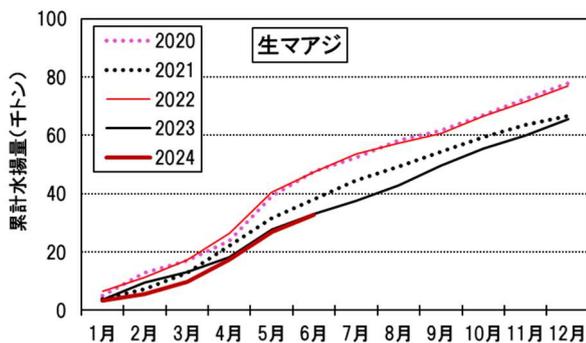


図10. 2020～2024年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

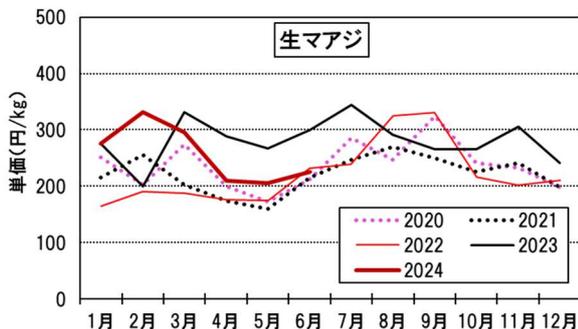


図11. 2020～2024年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

マアジの全国主要港における本年6月末現在の水揚量は3.3万トン(太平洋側0.7万トン、日本海側2.6万トン)で、前年同期(3.3万トン)並みであった(図

10)。日本海側では、5月ごろから隠岐海峡周辺で漁獲が続いたが、境港における1～6月の水揚量は前年の半分程度であった。東シナ海側では、5～6月は中南部海域主体に対馬海域でも漁獲があり、1～6月の東シナ海側の水揚量は前年をやや上回った。価格は1～2月は前年を上回ったものの3月以降は下回り、2020年並みの水準で推移した(図11)。

(水産情報部 源 浩輔)

### (4) カツオ

近海竿釣り船は例年同様1月末ごろから出漁した。2月上旬は例年漁場となる硫黄島南東海域で比較的好調なスタートで(図12)、カツオ大銘柄を漁獲し、主に千葉県勝浦港に水揚げした。その後、近年初漁期に活況を呈する南西諸島周辺へ主漁場が移り(図12)、2月中旬以降はカツオ大銘柄を主体に小・極小銘柄なども漁獲し、鹿児島県鹿児島港などへ水揚げした。ただし、3月下旬に南西諸島周辺の漁獲量が低下したためか、4月になると再び伊豆小笠原列島沿いの海域に漁場を移して操業する船が増加した(図12)。

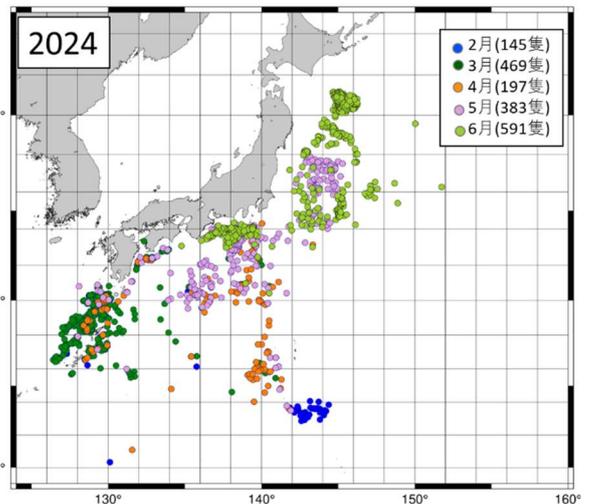


図12. 2024年1～6月の近海竿釣り船の漁場(情報収集海域全体)

また、4月にまき網によるカツオの漁獲が始まったが、漁期はじめの主漁場となる房総周辺ではまとまったカツオの群れがみられず、4月はほぼ水揚げがなかった。千葉県勝浦港の本年4月のカツオの銘柄別水揚量を追うと、同月中旬ごろから大型魚に混じって体重1～2kgの小型魚が出現した。この小型魚は、例年は3月ごろには伊豆小笠原列島沿いで出

現が見られるが、本年は4月中旬となったことから、伊豆小笠原列島沿いの小型魚の北上は例年より遅かったとみられる。

5～6月になると、竿釣りの漁場は四国～和歌山沖に移動し、5月末頃になると東北南部沖にも小型のカツオがみられた。6月中旬には漁場は東北沖まで北上し、まき網でも同海域でカツオのまとまった漁獲があった。東北海域では黒潮続流の影響により、青森県太平洋側の沿岸まで暖かく、東北北部海域への漁場の北上は前年より1ヶ月半程度早かった。この海域のカツオは宮城県気仙沼港に多く水揚げされ、戻りカツオのように脂が乗っていたことが特徴的であった(トピックス参照)。

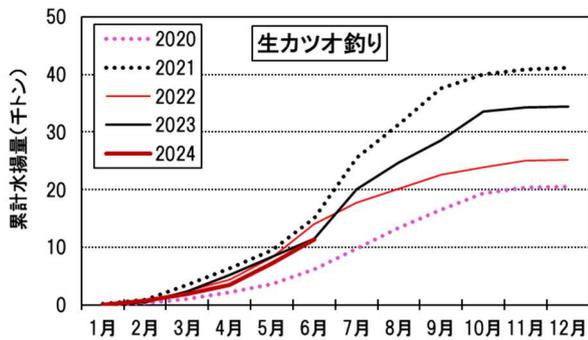


図 13. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別累計水揚量の推移

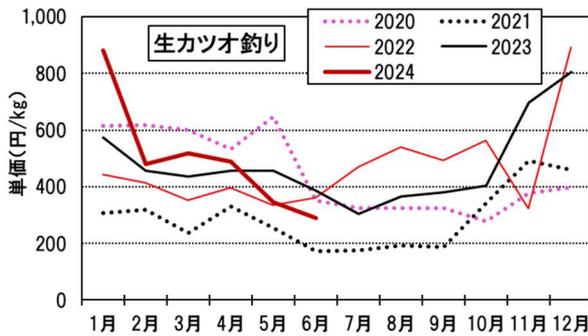


図 14. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別単価の推移

1～6月の全国の釣りによる生鮮カツオの水揚量は1.1万トンで、前年および過去4年平均並だった(図13)。価格は、全国的に水揚量が伸び悩んだ4月までは479～881円/kgと高値で推移したが、その後下がった(図14)。まき網による生鮮カツオの水揚量は0.3万トンで、前年および過去5年平均を下回った(図15)。しかし、価格は281～345円/kgで前年より安値傾向だった(図16)。

7月以降も東北海域の沿岸水温は高い状態が続

く見込みで、カツオ漁場は本年も沿岸よりに形成されると考えられるため、秋には新鮮な戻りカツオが期待できる。

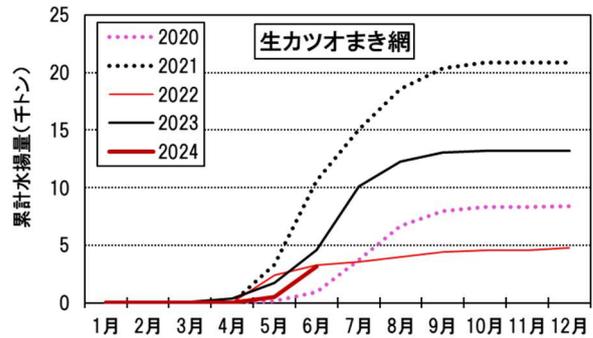


図 15. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

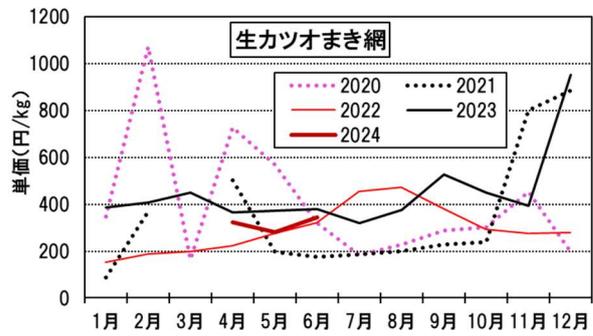


図 16. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

### ◎トピックス 7月の脂の乗ったカツオ

本年7月上旬に、JAFIC 気仙沼駐在所から「カツオの脂乗りが良い。戻りカツオのようだ」と報告があった。同時期に関東の小売店でも「宮城県産」の脂が乗っている切り身やサクが多く出回った。実際、脂が乗ったカツオに特徴的な、皮目に沿って脂が白っぽく色づいた状態が見られた(写真1)。この件はメディアでも報道され、近海竿釣り船の漁業者へのインタビューでは、夏に脂乗りが良いカツオが大量に揚がることははじめてだ、といったコメントも聞かれた。このように、漁業者の感覚としても、7月の脂乗りのいいカツオは珍しいものだった。

一般に、魚体の脂乗りは運動量や餌環境の影響を受けるため、JAFIC では海況と漁場の状況や、気仙沼港における魚体調査から、脂乗りが良くなった理由を検討した。

第一に、漁場位置とカツオの運動量の関係である。例年7月のカツオ漁場は黒潮続流上やその周辺の

暖水域に形成されるため、房総～福島沖が漁場となることが多い。ところが本年の漁場は、上半期のまとめで述べたとおり、黒潮続流の最北上部が切り離されて青森沖に形成された暖水渦の中やその周辺海域で活況となり、ここで「脂乗りが良い」カツオが漁獲された。この暖水渦の水深 50m 付近の水温は 17℃で、20℃以上に好んで分布するカツオにとっては冷たかった。例年の漁場となる黒潮続流域では水深 100m で 18℃以上あり、水深 100m 程度までカツオは潜ることができるが、青森沖の暖水渦周辺のカツオは水深 50m 付近より浅いところに分布していたと考えられる。このため、黒潮続流域のカツオと比較して鉛直移動ができない分、運動量が少なかったと考えられる。



写真 1.宮城県産のカツオの刺身  
(2024 年7月 17 日筆者撮影)

第二に餌環境である。青森沖の暖水渦周辺で漁獲されたカツオの胃内容物調査の結果、オキアミとみられる動物プランクトンが摂餌されていた(写真 2)。当該海域の詳細な餌生物の分布状況は不明ではあるが、冷水域で発生したオキアミを捕食できたこともカツオの脂乗りが良くなった要因の一つと考えられる。

以上のように、暖水渦にカツオが到達したこと、下層が冷たく運動量が抑えられたこと、餌が豊富であったことが重なり、脂の乗りが良くなったもので、今季に特有の稀な事例だと思われる。今後、季節とともに海水温が上昇し、7 月のような海洋構造や餌環境は長くは続かず、カツオの脂乗りはいったん落ち着く

と予想される。暖水渦は青森沖に停滞する見込みで、秋に水温が低下しはじめ、親潮系の冷水が南下すれば、例年の秋の戻りカツオも楽しめるだろう。

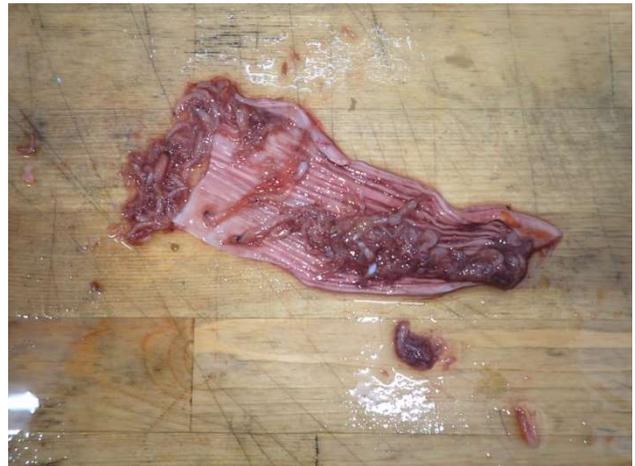


写真 2.カツオの胃内容物(7月 16 日気仙沼駐在所)  
(水産情報部 水野紫津葉)

### (5)ビンナガ

全国の生鮮ビンナガの 1～6 月の水揚量は 1.1 万トンで、好漁だった前年の 56%、不漁だった 2022 年並だった(図 17)。地域別では、本年は和歌山県紀伊勝浦港の延縄による生鮮ビンナガの 1～4 月の水揚量が前年より多く好調だった。一方、近海竿釣り船はビンナガの漁獲量が伸びず、初夏(5 月中旬頃から)の盛漁期に入っても目立った漁場はできなかった。紀伊勝浦港の水揚物の魚体を見ると、年初から大型(4 歳魚)主体の漁獲が続き、近海竿釣りの漁獲主体となる 3 歳魚が少なかった。このため、日本近海のビンナガ 3 歳魚の来遊量が少なく、初夏の竿釣りによる漁獲が低迷したと考えられる。ところが、6 月下旬に、青森沖の暖水渦周辺で近海竿釣り船によるビンナガ主体の漁獲が突如始まり(図 12)、その後は同海域でビンナガ主体に、7 月上旬まで短期集中的に漁獲された。例年は房総～東北南部海域が近海竿釣り船のビンナガ漁場となることが多く、主な入港地である千葉県勝浦港と宮城県気仙沼港に水揚げされるが、本年は漁場が東北北部海域となったため、竿釣りによるビンナガの水揚げは気仙沼港に集中し、勝浦港への水揚量は少なかった。

全国平均価格は 1～5 月は 337～410 円/kg で前年より安値だった(図 18)。これは、紀伊勝浦港で安定した水揚があったためとみられる。6 月は竿釣り主体の水揚量が少ないことが懸念されたためか、488 円

/kgに上昇し近年同月では最も高値だった。

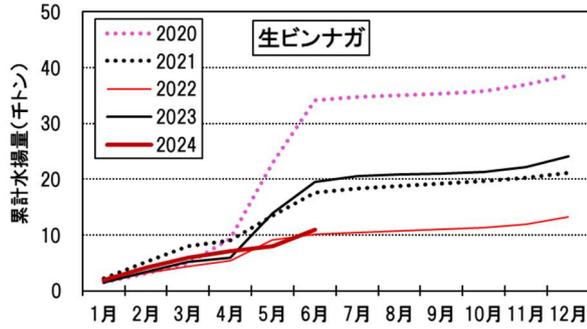


図 17. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮ピンナガの月別累計水揚量の推移

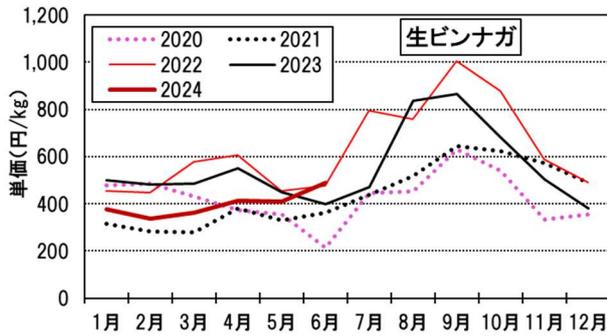


図 18. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮ピンナガの月別単価の推移  
(水産情報部 水野紫津葉)

### (6)スルメイカ

生鮮スルメイカの全国主要港における本年 1～6 月の累計水揚量は 1.3 千トンで、過去最低であった前年同期(2.0 千トン)の 63%、2019～2023 年同期平均(4.7 千トン)の 27%であった(図 19)。本年 1～6 月の生鮮スルメイカの価格は、4 月を除いて前年を上回った(図 20)。なお、4月に前年を下回ったのは、底曳網やまき網などの小型いか釣り以外の漁獲割合が増えたことに加え、小型サイズが増えたためと思われる。

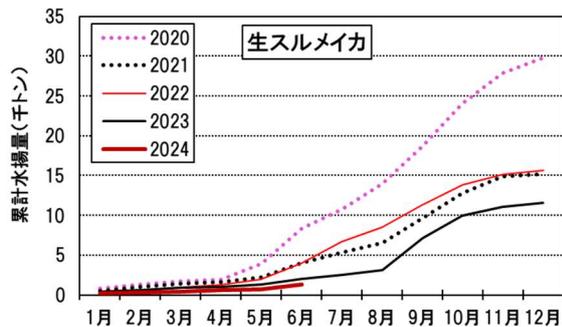


図 19. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

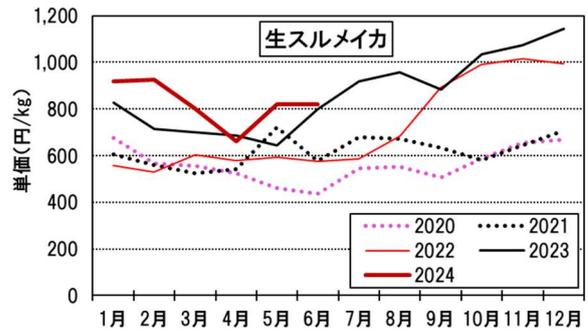


図 20. 2020～2024 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

日本海に分布するスルメイカの主群である秋季発生系群は、九州西岸～山陰沖で秋季に産卵し、例年 5～6 月に日本海を北上しながら成長し、山陰～北陸で小型いか釣り船の漁獲対象となる。この時期の水揚げの主体となる金沢港の本年 1～6 月の水揚量は 104 トンで、前年同期(205 トン)の 51%、2019～2023 年同期の平均値(1,932 トン)の 5%であった(図 21)。なお、本年 1 月の能登半島地震で能登の漁港が大きな被害を受けており、県外小型いか釣り漁船の入港できる港が金沢港だけになったため、操業隻数が少なくなった。

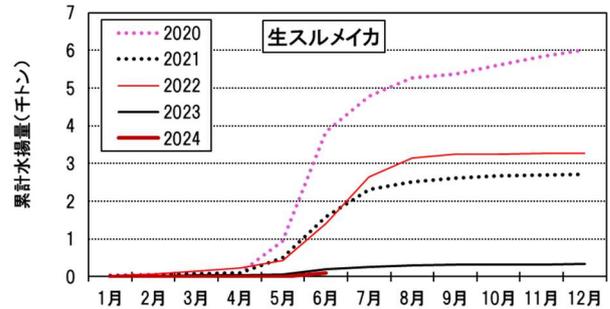


図 21. 2020～2024 年の金沢港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

太平洋側に分布するスルメイカは冬季発生系群が主体である。本年 1～6 月の三陸・常磐海域の水揚量は 587 トン(前年比 69%)であった。主要港で見ると、底曳網主体の石巻港の水揚量は 360 トン(前年比 82%、図 22)、八戸港では 71 トン(前年比 48%)であった。下北半島の小型いか釣り船による昼いか漁は 6月に始まったが水揚量は 10 トン(前年比 14%)と低調な出足であった。

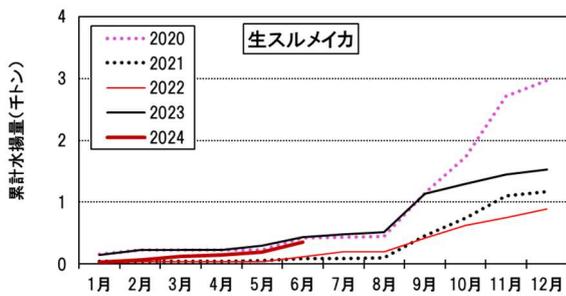


図 22. 2020～2024 年の石巻港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

中型いか釣り船（冷凍）の日本海のスルメイカ漁期は 5 月～翌年の 2 月末で、3～4 月が禁漁期間である。1月に三陸近海のアカイカ冬季漁に出漁した船もあったが、漁獲がなかったため日本海に漁場を変更して 2 月末までスルメイカ漁を行った。5～6 月は対馬東～能登半島沖の広範囲を探索したが、低調な漁況が続いた。

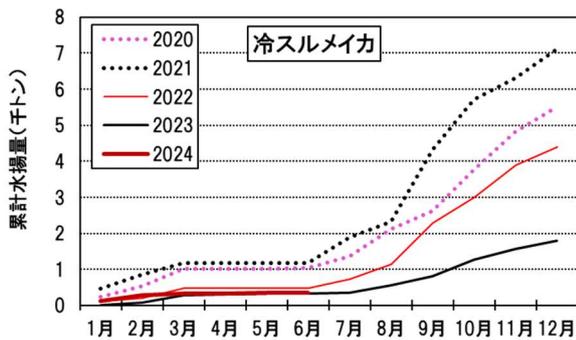


図 23. 2020～2024 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別累計水揚量の推移

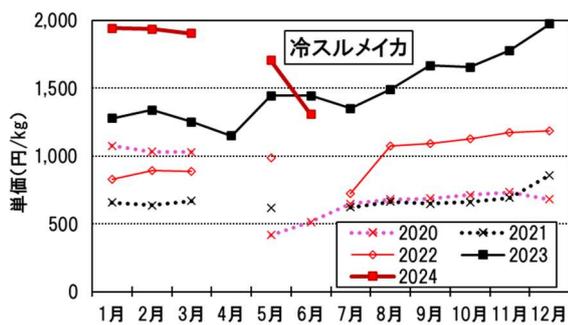


図 24. 2020～2024 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移

本年上半期の冷凍スルメイカの水揚量は 350 トンで、前年(328 トン)の 106%、2019～2023 年同期の平均値(802 トン)の 42%であった(図 23)。冷凍スルメイカの単価は、不漁を受け 2020～2021 年の 600 円/kg 台から徐々に上昇し、2023 年 12 月には過去最

高の 2,000 円/kg に達し、本年 1～3 月も高値を維持した(図 24)。しかし、本年 5～6 月には一部の小型いか釣り船や山陰の沖合底曳網船により比較的魚体の小さな船凍スルメイカが水揚げされたため、6 月の価格は 1,300 円/kg に低下した。

(水産情報部 緑川 聡)

(7)アカイカ(ムラサキイカ)

本年 1 月初旬に 6 隻の中型いか釣り船が三陸近海の冬季アカイカ操業に出漁した。しかし、前年と同様に群れが薄く十分な水揚量確保には至らなかった。5 月中旬から八戸を主体として函館および小木の中型いか釣り船 24 隻、大型いか釣り船 1 隻の計 25 隻が北太平洋西経海域に出漁してアカイカ操業を開始し、8 月現在も操業中である。近年、日本海でのスルメイカ漁の不振を受け、北太平洋でのアカイカ夏漁への出漁するいか釣り漁船の隻数は 25 隻前後で安定している(図 25)。

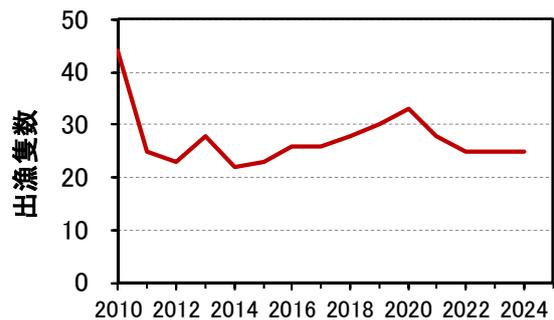


図 25. アカイカ夏漁の中型いか釣り船を主体とした出漁隻数(大型いか釣り船 1 隻を含む)の推移

今期に北太平洋西経海域に出漁した中国のアカイカ釣り船の隻数は約 30 隻で、7 月下旬まで操業する。中国船の出漁隻数は 2020 年には 50 隻を超えたが、ここ数年は減少傾向にある(図 26)。

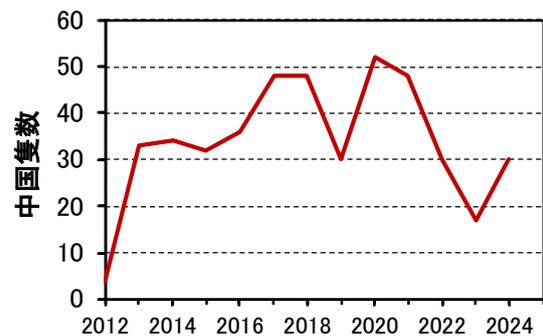


図 26. 北太平洋西経海域でアカイカ操業をする中国船いか釣り船隻数の推移

### ◎トピックス 海外のイカ資源と漁獲の動向

主要な海外イカの漁獲動向は、日本で水揚げされるスルメイカやアカイカの価格にも影響する。そこで、代表的な 2 種、アルゼンチンマツイカとアメリカオオアカイカについて上半期の資源と漁獲動向について述べる。

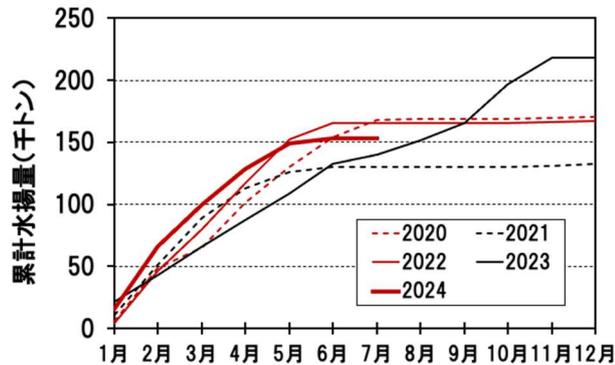


図 27. 2020～2024 年のアルゼンチン国内主要港のアルゼンチンマツイカの累積水揚量の推移(データ出典:

[https://www.magyp.gob.ar/sitio/areas/pesca\\_maritima/desembarques/](https://www.magyp.gob.ar/sitio/areas/pesca_maritima/desembarques/))

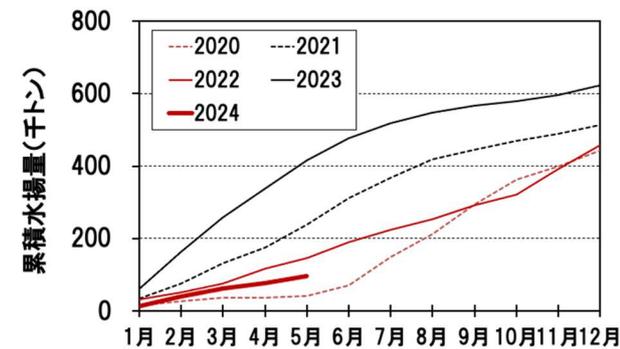


図 28. 2020～2024 年のペルー沿岸のアメリカオオアカイカの累積水揚量の推移(データ出典:IMARPE、<https://ogeiee.produce.gob.pe/index.php/en/shortcode/oe-documentos-publicaciones/boletines-pesca?start=0>)

アルゼンチンマツイカ(以下、マツイカ)の主たる漁場はアルゼンチン 200 海里内およびフォークランド諸島周辺とそれらに隣接する公海で、主漁期は 2～5 月である。このうち、前者における本年 1～6 月の水揚量は 15.3 万トンで、前年同期を上回った(図 27)。アルゼンチンからのイカの輸出量は本年上半期は 7.6 万トンで、前年の 5.1 万トンの 1.4 倍となり、最大の輸出先である中国への輸出も急増した。本年上半期の輸出金額も 1.9 億米ドルに達し(2.5 米ドル/kg)、

前年の 1.8 億米ドル(2.1 米ドル/kg)を上回った(<https://www.tridge.com/news/argentinas-squid-exports-reached-75500-tons--wysvfu>)。

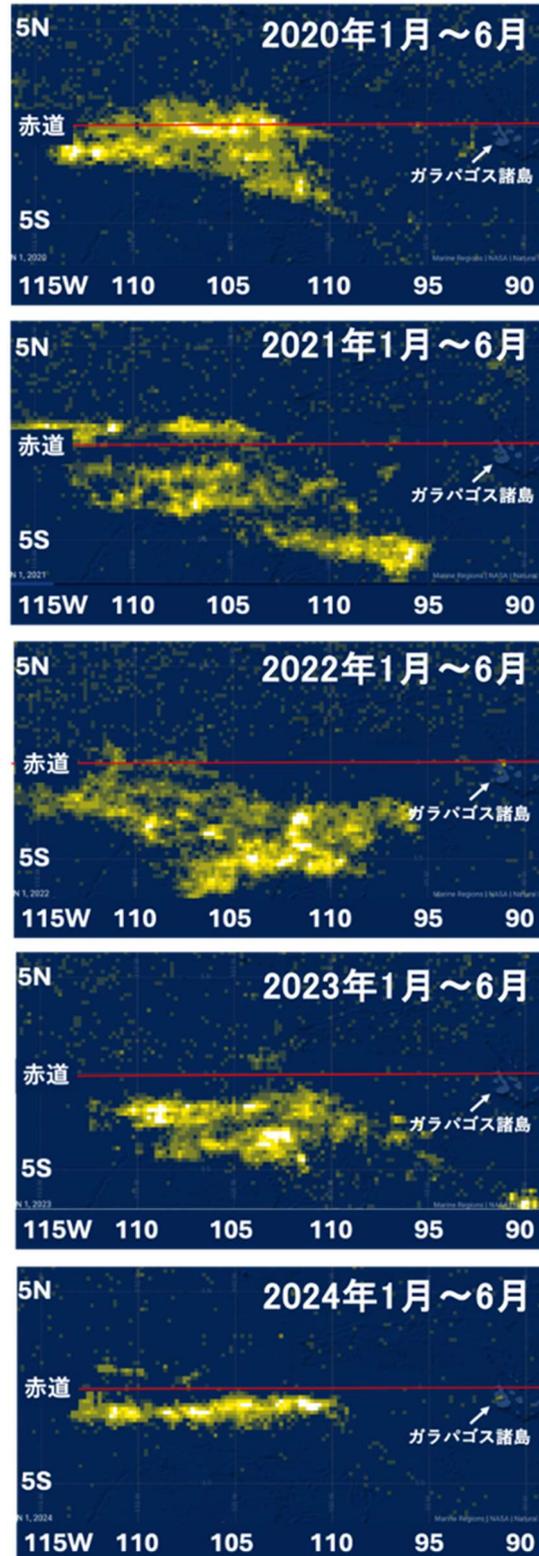


図 29. 夜間可視画像(VIIRS)による 2020～2024 年 1～6 月におけるガラパゴス諸島西方の赤道海域のアメリカオオアカイカ操業船の分布(データ出典:<https://globalfishingwatch.org/map/index>)

アメリカオオアカイカは大型のアカイカの仲間で、国際的に加工原料として重要である。主漁場はペルーの沿岸・沖合と近年開発されたガラパゴス諸島の西側の赤道海域である。このうち月別水揚量が公表されているペルー沿岸の漁獲動向について述べる。本年のペルー国内の1～5月の水揚量は、豊漁だった前年を大幅に下回った(図28)。これは新型コロナ禍の影響でペルーの水揚が激減した2020年に次ぐ低水準である。背景としては、前年から本年初頭まで続いた過去20年間で最も激しかったとされる南米北西部沿岸の海面水温が顕著に高くなる“沿岸エル・ニーニョ”<sup>(注)</sup>の発生が考えられる。一方、当該海域でのこのエル・ニーニョ現象は本年4月には収束しており、夏以降は海面水温が低下するラ・ニーニャ傾向に向かうと予測されている。以上から、アメリカオオアカイカ資源は本年後半にかけて回復することが期待される。

(注)ペルー国立海洋研究所(IMARPE)が開発したペルー・エクアドルの沿岸に特化したエル・ニーニョ指数(ICEN)。エル・ニーニョ1+2海域(西経90度～80度、南緯10～0度)の海面水温の3ヶ月移動平均として計算される(Takashiら2014、IMARPE)

一方、ガラパゴス諸島西側の赤道上のアメリカオオアカイカ漁場では400隻を超える中国いか釣り船が操業している(SPRFMO 2023 SC11-Doc29\_rev1)。2020～2024年の1～6月における漁船の操業範囲を見ると、本年は2020年以降で最も縮小した(図29)。この原因として、2023年に発生したエル・ニーニョの影響により資源が減少したことが考えられる。

前述のように、エル・ニーニョが解消され、更にラ・ニーニャ傾向に向かうと見られるため、アメリカオオアカイカ資源の回復が期待される。

(海洋事業部 酒井光夫)